



Title	＜図書紹介＞『比較文学を学ぶ人のために』
Author(s)	ヨコタ村上, 孝之
Citation	大阪大学言語文化学. 1993, 2, p. 137-138
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78184
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

図書紹介

ここでは、言語文化学会会員が出版に関して大きく関わった図書の紹介をいたします。

松村昌家編『比較文学を学ぶ人のために』、京都、世界思想社、1993年出版予定

比較文学は新しい学問ですから、哲学や心理学なんかと比べて、固有の術語が確立していませんし、方法論というようなものもあまり整理されていません。比較文学とは方法ではなく、対象を指示する語に過ぎないと断言する比較文学者もたくさんいます。学生の頃に聞いた比較文学のシンポジウムで、渡辺守章先生が「僕は比較文学なんかどうでもいいんです」とおっしゃっていたのが、私にはとても印象的で、哲学の研究会で「私は哲学なんかどうでもいい」という人はいないんじゃないかと思います。前置きが長くなりましたが、この本は、そういった混乱した状況を念頭に置いて、比較文学の「方法」、目的、研究対象などを、予備知識の全然ない読者——大学（院）の授業で始めて比較文学に接する学生を想定しているのでしょう——に、わかりやすく解き明かした本です。理論的な総論に、比較文学の重要なテーマが各論として十ばかり続きます。「西洋文化の受容と訳語の成立」、「坪内逍遙とヴィクトリア朝小説」、「永井荷風のフランス」、「森鷗外のドイツ体験」といったものです。日本の比較文学界は米欧とは違う問題意識を持っているので、そのカタログとしても役に立ちます。また、今後の研究の展望や文献解題もあり、これから比較文学を知ろうという人には便利でしょう。私の寄稿した論文は、「二葉亭とロシア文学」という古典的なテーマを扱いながら、比較文学というパラダイム自体を一つのイデオロギーとして批判したもので、こうしたself-subversionも収められているところが、本書の売りではないでしょうか（もっとも、まだ印刷に回ってませんから、編集者に没にされるかも知れませんが）。京都の小さい出版社から出るもので、執筆者も概ね関西在住の学者です。経済・文化・出版の領域における東京帝国主義に対するレジスタンスとしての意味もあると思います。再版が出るとその分の原稿料が入るので、その意味も込めて、是非一部公費でも私費でもお求めいただけると私は大変うれしいのです（比較文学は

私にとってどうでもよくはない)。(ヨコタ村上孝之¹⁾)

¹ 言語文化部ロシア語教育講座